

佳作

生きる 火災事故にあつて

福島県いわき市立平第一中学校一年 松本 奈々

私は今、生きています。もしかしたら私は今、この世にいなかったかもしれない。私は四年前、「死」という怖さに直面した。

四年前の三月三十日。その日は、三月末だといふのに冷え込んだ一日だった。私は通っていたバレエ教室にいた。その時はまだ、とても恐ろしい体験をするとは夢にも思わないうちだった。バレエレッスンの準備を済まして待合室にしていると、建物の一角から臭い白煙が立ち込めてきた。待合室の隣室でレッスンをしていた先生が、血相を変えて私達の所へかけ込んで来て叫んだ。

「火事だ！逃げる！」
私は、何が起こったのか見当がつかなかった。同時に、レッスンを受けていた女の子が一人、私の前を通り、待合室にいる彼女のお母さんと弟のもとへ走って行った。彼女は、四月に幼稚園へ入園するのを楽しみにしていた、くりっとした目をしたかわいいう女の子だった。

先生が「私についてきて」と叫び、いつもの出入り口と正反対の方向に呼び寄せた。この時まで私は、その女の子と彼女の母、弟と一緒にいた。私は、必死で先生の後を追って走った。建物の一番奥の窓から隣の建物の屋根の上へ飛び降りた。その時すでに黒煙がすごい勢いで私の後ろに迫っていた。飛び降りた屋根の上でふり返るとあの親子三人はいなかった。

「どうして？どうしてついてこないの？」

私は隣の会社の事務室に一時保護された。現場の辺りは騒然としていた。母が私を迎えに来た。母は私を見つめるなり泣いて私を抱きしめてくれた。自宅に帰ってテレビをつけると火災事故のニュースが流れ、初めてあの親子三人が亡くなったことを知った。



私はその時小学二年生だったが、言葉にならない悲しみと悔しさを味わった。一瞬にして命をうばわれてしまった親子の無念さを思うと今でも胸が痛む。もし彼女が生きていれば、私の妹と同じ小学一年生で元気に楽しい小学校生活を送っていたはずである。親子三人の未来を一瞬にしてうばった火事が今でも許せない。

私は今、中学校に通いながら勉強や習い事に日々追われ、辛いときもある。しかし、あの親子を思い出すと、私の中でどこからともなく頑張る力が湧いてくる。人間生きていればいろいろなる事を経験する。経験できるということは、生きていく証でもあると私は考える。最近、自殺サイトで自殺する人がいるとよく聞く。命を粗末にするなんて私には考えられない。生きていくから味わえる日々のあらゆる出来事に感謝しながら、私は親子三人の分も充実した人生を歩んでいかなければならないと思う。